

愛着の問題を抱える子どもにかかわる現場の人たちに、いかにしてわかりやすく愛着の問題について理解していただき、支援に活かしてもらえるか。愛着障害への支援の必要性に駆られ、日々、現場を走りまわりながら、このことを考え続けてきました。『月刊学校教育相談』に「愛着」の視点を支援とかわりに」を連載し（二〇一七年四月号～二〇一八年三月号）、それをベースに加筆修正して一冊の本として結実したことに、大きな感慨を覚えます。

発達障害ととらえられていることもなかに、「愛着の問題を抱える」という視点でとらえ直すことで、その子の抱えている問題がクリアに見えてくることがある——最初に持った問題意識がこれでした。

この認識は、現場で子どもにかかわっている人ほど感じる事ができるものです。私は子どもたちが日々を過ごしている現場を大事にし、いつも現場に足を運んできました。現場の問題意識を掘り起こしてきたことが、この認識につながったのでしょうか。逆に言えば、子どもたちと日頃の行動を共有していない人には感じる事のできない問題意識だと思います。

これは発達障害の専門家だけでなく、愛着の専門家にも言えることです。目の前の子どもが抱えている問題に目を向け、古い愛着理論に固執する姿勢では、現代の子どもたちの愛着の問題にアプローチすることはできません。だからこそ、私は「支援に活かせる」ように、愛着のとらえ方を修正してきました。そして、現場で愛着の支援をわかりやすく実行してもらうために、「愛情

の器」モデルを構築し、支援に活かしてきたのです。「愛着に愛情は関係ない」という古い愛着理論に依拠しては、現実の愛着障害の支援は成功しないと考えています。

大切なのは「現場の意識」を持ち続けること。そこでのこどもの困り感、支援している親や先生方の困り感に寄り添うことです。この「寄り添う」という立ち位置は、愛着の支援でもとても大切です。不用意にこどもといきなり「向き合わない」こと。まず同じ方向を向いて、そばに「寄り添う」ことが大切なのです。これからも現場に寄り添い、愛着の問題に寄り添いながら支援していきたいと思っています。

残念ながら、今後ますます、愛着の問題は大きな問題になっていくと思われれます。本書が現場での支援のお役に立てれば、これに勝る喜びはありません。

二〇一八年五月

米澤 好史

【参考文献】

- 米澤好史 2015a 「愛情の器」モデルに基づく愛着修復プログラムによる支援―愛着障害・愛着の問題を抱えるこどもへの支援―『臨床発達心理実践研究』10(1) 41-45
- 米澤好史 2015b 『発達障害・愛着障害 現場で正しくこどもを理解し、こどもに合った支援をする』「愛情の器」モデルに基づく愛着修復プログラム 福村出版
- 米澤好史 2016 「愛着障害・愛着の問題を抱えるこどもの理解と支援―愛着の問題のアセスメントと『愛情の器』モデルに基づく愛着修復プログラムによる支援」『日本学校心理士会年報』8 17-28
- 米澤好史 2017 「愛着修復プログラムの実践―愛着障害・発達障害への支援」『臨床発達心理士 わかりやすい資格案内』第3版」学会連合資格「臨床発達心理士」認定機構 〔編〕金子書房 91-93
- 米澤好史 〔編著〕2018 『愛着関係の発達理論と支援』金子書房（近刊）